

小学校国語科におけることばの教育に関する研究（3）

—オノマトペを楽しみ、理解を深める活動—

*津田智史

要旨

本稿は、小学校国語科でのオノマトペを使用した活動を提示するものである。『国語編』で示される、日本語の特質の理解や、言語感覚の育成には、オノマトペを使用した活動が有用である。オノマトペをとおして、世界の言語との対照からみた日本語オノマトペの位置づけや、オノマトペ自体の表現性、形態や音象徴的特徴などを学ぶことができる。とくに小学校国語科の段階においては、自身の言語生活をふり返りつつ、オノマトペの使用を楽しむことが重要となる。そのためには、言語生活のなかの類似オノマトペの表す意味や内容の差異について考え、児童・生徒が相互に個人の感覚的な違いを言語化することによる活動が重要となることを述べた。

Key words： ことばの教育、オノマトペ、言語感覚、国語科教育

1. はじめに

—動詞で泣くイギリス人、副詞で泣く日本人

(窪菌2017)

これは、人の泣く様子をどのように表現するかについて言語による違いを表したものである。英語では異なる動詞で表すのに対して、日本語では異なる副詞によってどのように泣くのかを表している(表1)。それが冒頭の句に表されている。表1の日本語の例にもあるように、聞こえた音や声をそのまま表したものが擬音語(擬声語)であり、様子や状況をことばで表したものが擬態語である。擬情語や擬容語などを設定する立場もあるが、それらすべてを総称してオノマトペと呼ぶ。表1では泣く様子をどのように表すかについて示しているが、ほかの様子や状況においても、同様の違いがみられる。つまり、さまざまな様子や状況において、日本語の方が英語よりもオノマトペ(副詞)を用いてその状況を表しやすいという特徴があるということである。そうはいても、日本語が世界中の言語のなかでもっとも多くオノマトペをもつ言語ということではない(秋田2017)。ただし、日本語にはオノマトペが多くみられるのは間違いなく、それによ

てさまざまな音や様子を表していることに違いはない。

本稿は、日本語のオノマトペに注目し、小学校国語科のなかでことばの教育のためにどのように活用していくことができるかを検討するものである。本稿の構成は以下のとおりである。まず、2節では『小学校学習指導要領解説 国語編』(以下、『国語編』と略記)における

表1 「泣く」様子の日英対照¹

英 語	
cry	声を上げて泣く
weep	涙を流す
sob	すすり泣く
blubber	おいおい泣く
whimper	ぐずるように泣く
日 本 語	
ワーワー	(泣く)
メソメソ	(泣く)
クスクスン	(泣く)
オイオイ	(泣く)
シクシク	(泣く)

* 宮城教育大学 教科内容学域 人文・社会科学部門 (日本語学)

1 日英の語例は窪菌(2017)による。英単語の訳には、『リーダーズ英和辞典(第3版)』(2012研究社)を利用した。

教科の目標に関する記載を確認しつつ、教科書や文学作品のテキストのなかのオノマトペについてみていく。次に、3節ではオノマトペをとおしてなにを学ぶことができるのかについて示す。そして、4節では言語生活のなかのオノマトペをふり返りながら、オノマトペの使用を楽しみ、それに対する理解を深めていく活動を例示する。最後に、まとめと今後の課題を示す。

なお、小学校国語科（および初等教育）のなかでは「オノマトペ」という用語を使用することは適していないと思われる。まず小学校国語科では、それがなにを表したものであるのか、またどのような音や様子を表しているのか、そういったことへの理解を進めるべきである。その点で、擬音語や擬態語ということばの方が適しているといえるだろう。ただし、ほかの用語も含めて定義や使用にゆれがあるのが現状であり、ひとまず本稿では総称して示す場合にはオノマトペと呼ぶこととする。

2. 教科書・文学テキストのなかのオノマトペ

現状オノマトペは国語科のなかで大きく取り上げられるものであるとはいえない。教材分析、とくに物語文の読解の際に、副詞や修飾表現、比喩的な表現が、中心となる登場人物や作品全体の雰囲気、心情を反映していることから、それをもとに読解の助けとすることはある。それらの表現に注目してテキストの読みを深めることは、ある種物語文読解の定石のひとつである。ただ、オノマトペはそのような表現のごく一部であり、それがすべてではないのもまた事実である。加えて、学年が上がるにつれ、感覚的な表現のオノマトペよりも、具体的な文脈、副詞（句）、比喩などによる表現の使用が多くみられるようになる。その点で、オノマトペに注目するということが国語科のなかであつかえるかどうかは、学年や教材による場合がある。

とはいえ、オノマトペが言語としての日本語の特質であることに疑いの余地はない。『国語編』をみてもわかるように、国語科においては教材内容の理解だけでなく、国語としての日本語の理解や使用についての能力を育てていくことが求められる。国語科の目標については、『国語編』に以下のような記載がある。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資

質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

（『国語編』 p11）

この目標の詳細については『国語編』に譲るとして、オノマトペがどのように国語科に貢献できるかについては、大いに可能性を秘めているように思われる。オノマトペは私たちの日常生活でかなりの頻度で、かつ効果的に使用されており、オノマトペを使用することにより音や様子を感覚的に共有し、聞き手（読み手）に伝えることができる。もちろん、オノマトペは臨時的で即興的であるという面もある。しかし、日常生活のなかで私たちが使用しているオノマトペの多くは意味・用法、使用場面が共有されており、コミュニケーション上なくてはならないものである。言い換えれば、オノマトペによって複雑な場面や状況を感覚的・感性的に共有したり、微妙なニュアンスを表し分けたりすることができるということである。また、先述したように、オノマトペの豊富さは日本語の特徴のひとつである。そうであるならば、児童が伝達表現としてのオノマトペの使用を楽しみ、日本語の特質としてのオノマトペの理解を深めることができれば、それは国語科の目標に合致したものになる。

そこで、ここでは教科書教材や文学作品のテキストのなかでオノマトペがどのように用いられているのかを例を挙げつつみていくことにする。また、創作のオノマトペについても触れることにする。

2.1 教科書のなかのオノマトペ

教科書教材として、ここでは「走れ」と「世界でいちばんやかましい町」にみられるオノマトペについてみてみたい。

まずは、「走れ」(村中李衣 文)にみられる擬態語についてみる。以下は、登場人物・のおよが憂鬱な気持ちで短きより走りに臨み、心が折れかけたところに母親と弟の応援が聞こえてきた場面である。なお、テキストは『新編 新しい国語 四上』(東京書籍 令和2年度

版)による(下線・四角囲みは筆者)。

「姉ちゃん、行けっ！」

「のぶよ、行け！」

思わず、ぎゅんと足が出た。

「走れ！ そのまんま、走れ！」

おしりが、すわっと軽くなる。次のしゅん間、体からみついていたいろんな思いが、するするとほどけていった。

のぶよは直前まで体が重く、後ろへ下がっていくように感じていたのだが、母親と弟の応援を聞くことで「思わず、ぎゅんと足が出た」。もちろんこれは気持ちの変化を表しているもので、実際に大きく状況が変わったわけではない。しかしながら、のぶよの心持ちが変化し、自然と前への推進力を感じるようになったことを表している。そして、おしりも軽く感じるようになる。そのおしりが軽くなる様子を、テキストでは「すわっと」という擬態語で表している。

ところで、この「すわっと」という擬態語は日常的に用いられるものではないように思われる。小野編(2007)には、次のように記載されている。

すわ

刀をすばやく抜くさま。

「太刀のに手を掛け、すはと抜いで」(義経記)

これをみるとかなり限定的な意味合いであることがわかる。限定的であるがゆえに、日常の言語生活においてはあまり耳にすることのないものである。また、この語積からは、「走れ」のテキストのように用いられることは予想しがたい。しかし、「走れ」のテキストを読んでいく段階では、それほど違和感なく文意を得ることができ、状況についても感覚的に共有できる。それは、後述する音象徴的な要因によるものと思われるが、オノマトベとしての「すわ(っと)」は、のぶよの気持ちとともに体全体が軽くなっていく様子をわかりやすく表しているものといえる。

続いて、「世界でいちばんやかましい町」(ベンジャミン・エルキン 文/松岡享子 訳)にみられる擬音語

についてみていく。以下は、冒頭の世界一やかましい町を描写している箇所の一部である。テキストは『新編 新しい国語 五』(東京書籍 令和2年度版)による(下線・四角囲みは筆者)。

人々は、自分たちの町のアヒルが、世界中のどこのアヒルよりもやかましい声で クワックワツ と鳴くこと、自分たちの町の家が、世界中のどここの家の戸より大きな音を立てて バタンバタン としまること、自分たちの町のおまわりさんが、世界中のどこのおまわりさんよりもけたたましい音で ピーツ と笛をふくことを、たいそう自まんしていました。

これは冒頭に示される、物語の舞台であるガヤガヤという都の説明である。四角囲みと下線部は、擬音語や擬声語であり、世界一やかましい町の様子を表すために、オノマトベが効果的に用いられていることがわかる。物語の終盤では、一転、静かな町となるわけであるが、物語の最終盤の記述は冒頭の上記内容と対応するように示される。

やかましい声で クワックワツ と鳴きました

> やわらかな声で クワクワ と鳴きました
大きな音を立てて バタンバタン としまる

> 音を立てずに すっ としまりました
けたたましい音で ピーツ と笛をふく

> やさしく そつ と笛をふきました

四角囲みの「クワックワツ」は促音を落とすことで、勢いがそがれた静かな鳴き声であることを表している。これは擬音語同士を、形態によって対比させ、その違いを際立たせたものである。一方で下線の方は、「バタンバタン」と音を立てて閉めていた戸は「すっ」と音を立てずに閉めるようになり、「ピーツ」とけたたましく吹いていた笛は「そつ」と吹かれるようになっている。下線の方は、擬音語から擬態語に変化させることにより、音が極力立たないように変化したことを表している。いずれもオノマトベによって、やかましい町から静かな町へと変化したことを効果的に示しているのである²。

2 もちろんオノマトベだけではなく、そのほかの修飾成分(「やかましい声で」>「やわらかな声で」など)ともかかわって、相乗的に静かな町の情景をやかましい町と対比させていることはいうまでもない。

『教師用指導書 研究編』では、ここでみた2つの教材の指導のポイントとして、オノマトペに注目させることや、冒頭と終盤の表現を照らし合わせて変化をとらえることを挙げている。いずれも物語の山場にかかわる個所であるので、その表現に注目した読解は重要となる。

2.2 文学のなかのオノマトペ

続いて、文学作品のなかにみられるオノマトペについて概観する。文学作品では、作者独自のオノマトペもみられる。よく取り上げられるものとして、宮沢賢治のオノマトペがある。宮沢賢治のオノマトペはさまざまに創作されており、その独特なオノマトペは巧みに用いられている。さらに読み手を引きつけるものである。ここでは、「やまなし」から例を挙げてみていく。

クラムボンは かぶかぶ わらったよ。

多くの人が一度は聞いたことがあるであろう有名な一節である。しかし、この「かぶかぶ」は、現代日本語において聞き慣れないものではないか。これはクラムボンが笑う様子を形容したもので、創作された擬態語である。宮沢賢治の作品には、このような彼独自のオノマトペが頻繁にみられるわけだが、そこにはいくつかの傾向が見出せるようである。田守（2010）は、現代日本語でみられるようなオノマトペを慣習的なオノマトペとし、それとの対比により宮沢賢治のオノマトペの使い方の特徴をまとめている。大きくは次の4点が挙げられる。

[法則1] 慣習的なオノマトペを構成している音を別の音に変化させる。

[法則2] 慣習的なオノマトペに音を挿入する。

[法則3] 慣習的なオノマトペを構成している音の位置を入れ替える。

[法則4] 慣習的なオノマトペの語基を反復させる。

（田守2010：119-121）

法則1には、子音を交替させるものや（「がぶっ」>「かぶっ」など）、母音を交替させるもの（「むにゃむにゃ」>「もにゃもにゃ」など）、またオノマトペを構成するモーラを別のモーラに交替させたもの

（「ぴしゃっ」>「どしゃっ」など）がみられる。法則2には、促音「っ」や撥音「ん」の挿入（「ピカリピカリ」>「ピッカリピッカリ」、「ぐにゃり」>「ぐんにゃり」など）、母音の挿入（「くらしくらし」>「くうらしくらし」など）、モーラの挿入（「ちゃらんちゃらん」>「ちゃらんちゃらん」など）があるようである。そして、法則3は音の位置の入れ替え（「こっそり」>「そっこり」など）、法則4は語基の反復（「くつつつ」>「くつつつくく」など）である。このように、宮沢賢治オノマトペの多くが慣習的なオノマトペから以上の法則によって創作されていることがわかる（田守2010：121）。

それでは、「かぶかぶ」はどのような過程を経て創作されているのだろうか。田守（2010：14-17）はクラムボンを蟹を意味するものと仮定したうえで、蟹が泡を吹いている様子があたたかも笑っているようにみえることから、水中から泡を細かく吹き上げる音や様子を表す慣習的なオノマトペ「ぶくぶく」にもとづいているのではないかと推測している。「ぶくぶく」の「ぶ」と「く」の位置を入れ換えると「くぶくぶ」となる（法則3）。ただし、これは語呂が良くなく、発音もしにくいので、「く」を「か」に変えてよりスムーズに発音できるように変えた（法則1）ということが考えられるとする。もちろん、宮沢賢治の真意を測ることはできないが、ここで「かぶかぶ」というオノマトペが使用されることで、クラムボンの存在の不思議と合わさって、幻想的で神秘的な作品の世界観を際立たせるものになっている。

続いて、ある創作オノマトペに関するエピソードを紹介する。小野（2009）には、小野氏がお笑い芸人の加藤浩次氏のラジオにゲスト出演した際に、加藤氏が流行らせたいという「ダズーン」という創作オノマトペの意味を尋ねられたというエピソードが掲載されている。小野氏は「何か、前に勢いよく押し出していく、ということですか？ 力強さと長さを感じますね（小野2010：15）」と予測を話したが、加藤氏は「前に出て行く？ あ、そうなんですか……いや、実は、これは、すごく落ち込んだときの擬態語なんです……（小野2010：15）」と答えたという。いずれの意味もありえそうではあるが、「ダズーン」ということばだけではどちらの意味かの判断はつかない。小野（2010：17）にも、独自に創作されたオノマトペは適切な文脈

が与えられなければ意図した意味が伝わらないことがあり、オノマトペ単体や、「あまりのことにダズーンとなった」などの抽象的な表現だと、それがどういう意味なのか推測できる方が難しいという旨が示されている。

さらに、創作オノマトペはサブカルなどの現代的な文化と相まって、文学作品だけでなくマンガなどで頻繁に、かつ効果的に用いられている。文学作品ではテキストがあり、マンガや日常生活のなかでは会話の文脈によってある程度の意味の予測はできるはずであるが、あえて創作オノマトペを使用することによって、慣習的なオノマトペでは表せない雰囲気の違いを伝えることも可能になるだろう。オノマトペはその点でも言語感覚に結びつくものである。

3. オノマトペを学ぶ、オノマトペから学ぶ

それでは、オノマトペをとおして、具体的にどのようなことを学ぶことができるのだろうか。オノマトペを用いた国語科での授業実践報告や提案については、系統的・体系的に指導する必要性を述べるものがみられる（小野ほか1999）。また、学習指導要領の言語事項に照らし合わせ、オノマトペを日本語の特質として学ぶ意義を唱えるものもある（中里2005）。いずれも重要な観点であるが、実践としては数があまりみられない、オノマトペ指導の検討は、現状ではいまだ十分とはいえないように思われる。日本語のオノマトペについて理解しつつ、オノマトペをとおしてどのように学んでいくことができるのかを検討していく必要がある。

ここでは、オノマトペのもつ特性からなにを学ぶことができるのかという点について言及しておきたい。ここで取り上げるのは、対照的な視点によるオノマトペからみた日本語のオノマトペの位置づけ（3.1節）、オノマトペの表現性（3.2節）、そしてオノマトペの形態と音象徴（3.3節）についてである。

3.1 日本語のオノマトペと世界のオノマトペ

先にも述べたように、オノマトペの豊かさは日本語の特徴のひとつである。しかし、その豊かさに気づくチャンスは日本語のなかで生活しているうえではそう多くない。日本語の特質として気づくためには、ほかの言語と対照することなどが考えられる。幸い、近年

はオノマトペにかかわる書籍などが多く発行されており、そのなかには日本語以外のものもみられる。たとえば、英語に関するタニクリフ（2021）や韓国語に関する辛（2019）などがある。冒頭でも述べたが、日本語ではオノマトペ（副詞）で表す内容を、英語では動詞で表し分けたりするように、英語に比べ日本語のオノマトペは豊富である。そのうえで、多様な日本語のオノマトペを英語ではどのように言い表すことができるのかという点に着目し、自然な英語表現やふさわしい表現の紹介をしているのが、タニクリフ（2021）である。英語教育の需要が高まるなかにおいても、日英対照という視点はそれぞれの言語の特徴を明確化するためにも重要であろう。

一方で、韓国語のオノマトペは実は日本語のそれよりも豊富であるといわれている。辛（2019）をみても、韓国語のオノマトペが日本語のオノマトペに置き換えられないという例が多くあることがわかる。「골골（コルゴル）」は身体が弱く病気がちな様子を表し、「가우똥가우똥（キャウトウンギャウトウン）」は首をかしげる様子を表すオノマトペであるという（辛2019：4）。日本語にこれらの様子を言い表すためのオノマトペがないことは疑いない事実である。秋田（2017）によると、日本語がオノマトペを2000語以上もつものに対し、韓国語（朝鮮語）は5000語以上もつということである。

また視点を変えると、違いだけではなく、共通するものもみえてくる。日本語、英語、韓国語、ひいては世界中のいずれの言語でも共通するようなオノマトペも存在する。たとえば動物の鳴き声などを表すものである。オノマトペが私たちの音声言語を通じて表出されるように、いわゆる擬声語はまねしやすく、かつ模写しやすいものである。以下は秋田（2017）に挙げられる各言語の犬の声のオノマトペである。

「ワンワン」

韓国語	モンモン（멍멍）
インドネシア語	グクグク（guk guk）
バスク語	サウンサウン（zaunk zaunk）
英語	バウワウ（bowwow）
アラビア語	ハウハウ（haw haw）
ロシア語	ガフガフ（гав гав）

（秋田2017）

調音点や、使用される母音などに注目して観察してみると、秋田（2017）も述べるように、使われる音や語形がどこか似ていることが窺える。このように、日本語だけで考えるのではなく、ほかの言語とともに考えることにより、日本語の特質をより理解することができるであろうし、言語横断的な共通点を見出していくことができる。もちろん、どの学年でどこまでを教えるか／学ぶかには検討の余地があるが、オノマトペをとおした言語の特質理解という点では価値が見出せる。

3.2 オノマトペの表現性

さて、いかにオノマトペが臨時的であり、即興的で、そして創作しやすいものだとしても、慣習的に用いられるオノマトペは、日常生活のなかで一定の共通理解のもと使用されている。同じ笑う様子を表す擬態語をみても、「にこにこ」と「にやにや」は異なるわけで、その違いも感覚的に私たちは理解できる。そうであるならば、日常的に使用する慣習的オノマトペについて、その違いを理解するには大きな意味がある。中里（2005）や加古（2012）は読むこと指導のなかで類似表現との比較をおこない、萩中（2013）は書くこと指導のなかで形態的バリエーションでの比較をおこなっているものである。それぞれが、類似のオノマトペとの対比によって取り上げるオノマトペが表す様子や状況の差異を理解させようとしている。

ここでは、遠藤（2018）の「笑い方とオノマトペ」の授業提案を挙げつつ、オノマトペの表現性理解の重要性を述べる。遠藤（2018）では「「笑い方」を表すオノマトペには、どのようなものがあるか」という発問で、児童・生徒に日常の言語生活をふり返る工夫をおこなっている。実践研究の多くは、比較させる類似のオノマトペは教師側が用意している場合がほとんどである。比較に堪えうる表現や、円滑な進行のためには必要なことであるが、日本語の理解を深めるための活動を考える場合、日常の言語生活のふり返りや、自身の言語生活の実例として考えることは重要な点となる。遠藤（2018）のなかでは、「にこにこ、にやにや、にたにた」などが予想として挙げてあるが、実際にはさまざまな表現が現れるだろう。「へらへら」などの擬態語や、「アハハ」などの擬音語である。発問にオノマトペとあっても、「口角を上げる、ふきだす、ば

か笑い（する）、爆笑（する）」などオノマトペ以外にも出てこよう。そのなかからオノマトペを拾い上げていくことで、どういったものがオノマトペであるのかの確認をおこなうことができる。

そして、出てきたオノマトペからいくつかを選び、表す内容を比較していく。この段階において教師先導で表現を選定し、提示しても、その前段階に児童・生徒自身の言語生活とのかかわりが示されているので、それらが類似の表現であることは受け入れやすく、比較検討の活動に移行しやすい。遠藤（2018）では検討段階において、選んだオノマトペの違いを言語化していくが、例文を添えたり、絵や写真などで笑い方の違いを視覚化させたりすることも想定している。そのような活動を経ることで、笑い方のオノマトペのバリエーションやそれぞれの違いについての理解と興味を深めていくことができる。

このように、似ているオノマトペを比べてみたり、分類したりしていくことによって、日常では無意識的に使い分けている微妙なニュアンスの違いや、慣習的オノマトペの使用および表す様子の傾向もみえてくる。こういったことを考えるということは、自身のことばをふり返るということであり、自身の言語を深く理解することにつながる。なお、似ているオノマトペの比較や、意味の差異の理解のためには、小野（2018、2021）などが参考になる。

3.3 形態と音象徴

ところで、オノマトペを運用するにあたり、形態のバリエーションと音のもつイメージに言及しないわけにはいかない。ここでは、オノマトペのバリエーションを生む要素と、それぞれの音がもつイメージ（音象徴）について触れる。

たとえば「ふわふわ」の「ふわ」という、ひとつのオノマトペの中核となる要素についてみてみよう。運用される段階において、「ふわ」の形態のバリエーションは多くみられる。たとえば、「ふわっ、ふわり、ふわん、ふわふわ」などが考えられる。中核要素に別の要素（「っ、り、ん」）を付加したり、繰り返したりしていることがわかる。小野（2015）は、「ふわっ」は「ものが浮き上がる瞬間を描写」し、「ふわり」は「ものが浮き上がりかけてから実際に浮き上がって安定するまでを、ひとまとまりのものとして描写」し、「ふわん」

は「ものが浮き上がって、なにかまだ揺れ動いているような様子を描写」し、そして「ふわふわ」は「ものが浮いて漂い続けている様子を描写」しているとする。加えて、これらの要素を組み合わせ、*「ふんわり、ふわっふわっ」*などと使われることもある。同じ中核要素を用いている、それぞれが描写する内容は微妙に異なっている。それぞれの形で付加されるニュアンスは、小野（2015）には以下のように示される。

- 一、「っ」(促音) 非常に瞬間的な区切り目が付く。
- 二、「り」 一連の動作や状況をひとまとまりのものとしてある。
- 三、「ん」(撥音) 音や動作・状況がとりあえず終わりはするが、その結果や余韻が残る。
- 四、繰り返し 同じ状態が長く続く、同じ出来事が何度も繰り返される。

(小野2015:12)

このような形態的なバリエーションは、すべての中核要素で可能なわけではなく、「にこにこ」の「にこ」で考えると、「にこっ、にこり、にこにこ」はありえても、「*にこん」はありえないなどということがある。とはいえ、オノマトペを構成する中核要素から、形態的なバリエーションを系統的に理解できるので、このようなバリエーションの把握は重要である。

また、オノマトペはたとえ初めて聞くものでも、なんとなく意味が予測できる場合がある。それが話し手の意図どおりの意味かはさておき、大きく外れない範囲で判断できるものがある。2.2節で述べた「ダズーン」などもそうである。これは、それぞれの音のもつイメージがかかわっている。近年、音と結びつく、感覚的に得られるイメージに関する論考が多くみられる。そして、それは音象徴と呼ばれる。たとえば川原（2017）では、氏がメイド喫茶で実際におこなった架空のメイドの名前調査により、「萌えタイプ」のメイドと「ツンタイプ」のメイドで、それぞれ異なる音が結びつきやすいということを明らかにしている。調査は、「ワマナ、レヨナ」などと「サタカ、セトカ」などを提示し、どちらが「萌えメイド」の名前で、どちらが「ツンメイド」の名前だと思うか問うたものである。その結果、前者を「萌えメイド」、後者を「ツンメイド」とする確

率が74%となったという。このように、無意識のうちに、(上記の場合) 子音とイメージがかなりの確率で結びついているということが窺える。

さらに、このような音象徴はオノマトペにおいてもみられる。浜野（2017）は次のような例を示し、個々の音に特定のイメージやニュアンスが結びついていることを示している。

風船がパン (paN) と割れた。

糸をピン (piN) と張った。

鐘をカン (kaN) と叩いた。

(浜野2017)

浜野（2017）は、パンが「張りきった表面の破裂」を表し、ピンが「糸の緊張」を表し、そしてカンが「硬質のものを叩くこと」を表すとする。そのうえで、pが「張力のあるもの」を表すとする。このようなイメージやニュアンスは、さまざまに子音や母音を変化させ比べてみることで、顕在化していく。このほかにも、よく知られている濁音と清音の表すニュアンスの違いなどがある。これらのように、音とイメージが結びついていることは疑いなく、なおかつそれらは無意識的に共有されているといえる。

以上、形態と音象徴に注目し、日本語のオノマトペの特徴を把握した。音象徴については、言語横断的にみられることもあり、対照的にとらえることも可能であろう。また、ここでみてきたような特徴について言語化し把握することが重要であり、言語感覚を育むうえで必要なことといえるだろう。なお、オノマトペの形態や音象徴については、ここで挙げたもののほかにも田守（2002）などを参照されたい。

4. オノマトペを楽しみ、理解を深める

3節ではオノマトペをとおしてどのようなことを学ぶことができるのかについてみてきた。それでは、小学校国語科においては、どのようにオノマトペをあつかっていきべきであろうか。小学校の段階で、3節でみてきたような内容を網羅しようとするのは難しいだろう。そうであれば、まずはオノマトペに馴染み、オノマトペを楽しんで、それについて考える機会を与えることが重要に思われる。それによって、オノマト

への理解が深まったり、日本語の言語感覚を育んだりすることができるだろう。

ここでは、2つの活動を提示する。執筆者が大学講義内で実施するものであるが、内容的に小学生でも可能であると考えている。あつかうオノマトペを変えたり、状況や様子を変更することで、さまざまなオノマトペへの理解が深まったりするものと思われる。なお、津田（2020、2021）の授業提案では時数や活動目的等を提案したが、本稿ではオノマトペを使ってどのように活動をおこなっていくのがよいかというケース・スタディとして例示するのみにとどめる。

4.1 「恋するオノマトペ」

まず提示するのは、ある状況を設定し、それにふさわしいオノマトペを考えるという活動である。誰しもが経験するような状況を提示し、それをどういったオノマトペで表すのかを考え、共有することで、お互いのその状況をどのようにとらえたのかを理解する。オノマトペは、既存のものでも、ほかからの援用でも問題ない。新たに創作することも考えられる。すでに定着したオノマトペがあるような状況、机を叩く音や、せんべいをかじる音、いろいろな擬音語を改めて考えることもできるが、すでに刷り込まれている「ドン、バン」や「バリバリ」という音から抜け出せず、あまりおもしろい音が出てこないことが多い。そのため、より抽象的な状況や、状況に結びつくオノマトペが定着、慣習化していないようなものを選ぶ必要がある。執筆者の担当授業内では、「恋に落ちた瞬間のオノマトペ」を考える活動をおこなっている。本稿でも、そのテーマで論を進める。なお、本節の内容は、すでに津田（2019）で述べたものを本稿のために構成を変更し、加筆・修正したものである。

「赤い実はじけた」という教材がある。長い期間、小学校国語科教科書に掲載されていたものである。内容は、主人公の女の子の初恋の物語。以前、いところが教えてくれた、「急に胸が苦しくなってきた、とたん、胸の中で、赤い実はじけたの」という話。自分にもそんなときが訪れるのかとときどきしていた。そしてある日、お使いで来た魚屋さん。同じクラスの苦手な男の子が店の手伝いをしている。これまで意識をしていなかったその男の子と話しているときに、突然「パチン」と、「思わず飛び上がるほど大きな音を立てて、

胸の中で何かがはじけた」という話である。この「パチン」というオノマトペは、恋に落ちた瞬間を比喩的に表したものである。このような初恋の体験を表すオノマトペを考えるという活動である。

「恋に落ちた瞬間」という状況の場合は、小学校高学年以上が望ましいように思われる。それよりも下の学年でおこなう場合には、別の状況のほうが想定しやすいだろう。高学年においても想定が難しい場合には、自分の好きなものやことに出会った際にどのようなオノマトペで表すかを問うことになるだろう。好きなものや人に目を引かれたり、心奪われたりした瞬間をどのようにオノマトペで表すかということである。ここで「瞬間」とするのは、状況を限定することで、考えるオノマトペの範囲を制限すると、オノマトペを共有したのち、どのような傾向があるのか考える際に、対象の幅を狭めるためである。

それでは、実際に担当授業内でみられたものを例に挙げながら、「恋に落ちた瞬間のオノマトペ」にどのようなものがあり、どのようにまとめていくことができるかをみていくことにする。以下が、学生から実際に得られた「恋に落ちた瞬間のオノマトペ」である（表記は学生が提出したものによる）。すでに分類したものを示しているが、大きく4つのグループに分けられそうである。

- ① ぎゅっ、キュン、キュンキュン、きゅんっ、ぎゅん、キュー、すかっ、ズキッ、すっ、トゥンク、どきっ、ドキドキ、どきん、ドキュン、ドクンドクン、とくん、とっくとっく（心臓の音）、バクバク、はっ、フワッ、ポン、ぼっ、もぎゅ、ワクワク
- ② ガーーン、ガシャン、ギユンッ!!、ぎゅんんんっっ!!!、ぎゅーん、きゅびーん、ずっきゅん、ズキーン、ズッキューン、ズキーン、どっきゅん、ドカン、どっがーん、どっきんばっこんどっきゅーん、びりびり
- ③ カチッ、グサッ、ザクっ、しゅわーん、じゅわっ、ズキーン（と胸が打たれた）、ストン、ツン、トン、トボン、ぴたっ、ピン
- ④ キラキラ、きらん、ぱっ、ぱあーっ、ほわ〜、ほわほわ、リーンドーン

これらは、どういったようにその瞬間をオノマトペとして表しているのか、という点で分類したものである。「恋に落ちた瞬間」においては、心や気持ち、胸への刺激・高鳴り、気持ちや状況の変化を表すことが考えられる。①は、もっとも多くみられるもので、瞬間的な心の締め付けや感覚を表すものである。恋に落ちた瞬間は、胸の奥が締め付けられるようであり、ときめきが止まらないようでもある。そんな瞬間は、「ぎゅっ」や「トウク」などで表される。それだけでなく、これまでと違う違和感を覚え、それが恋であると気づいて拍子抜けする感覚を「すかっ」、気づいたことで心が軽やかになる感覚を「フワッ」と表したり、恋に落ちていく様子を「すっ」と表したりと、さまざまな表現がみられる。②は、恋の衝撃を表すものであり、その大きさの程度によってさまざまなバリエーションがみられる。突然訪れる恋においては、多くの場合、強い衝撃が伴っている。「ガーーン」や「ドカン」と衝撃音で表したり、胸を撃ち抜かれたように「ズキューン」と表したりする。また、長く片思ひなどしている好意を寄せる相手に話しかけられたときには「ぎゅんんっっ!!!」と強く締め付けられるような感覚や、ときには、「びりびり」としびれるような感覚を覚えることもある。③は、「赤い実はじけた」の「パチン」のように、恋に落ちた瞬間を比喩的に表すものである。恋に落ちた際のなんともいえない感じは、直接的な表現では表しきれない場合もある。そのようなときには、ほかのものや状況に置き換えて表すことがある。好きという感情が心に染みわたってくるような様子は「じゅわっ」と表される。これまでうまくはまらなかった感情が、恋という感情にはまったとき、それは「びたっ」や「カチッ」と表現できる。「あれ？私、恋してるのかな」と腑に落ちた感覚は「ストーン」というように表しもする。この落ちるという感覚は複数みられた。ほかにも、炭酸がはじけるように「シュワッ」と表すこともある。そして④は、恋に落ちた瞬間の本人の内面的なものではなく、周囲の雰囲気の変化を表すものである。恋に落ちたときには、心の内面的なものだけではなく、周囲の雰囲気まで大きく変化する場合がある。そんなときには、「リーンドーン」と大きな鐘の音とともに、周りの景色や色使いが急に明るくみえることがある。音を伴わなくとも、「きらん」と光が飛び交い、「ほわ～」と徐々に明るさが

溢れ、「ぱっ」と周囲の雰囲気を変えてしまう。そんな瞬間がある。これらは、ドラマや少女マンガなどのイメージに近いものだろう。

この活動では、「恋に落ちた瞬間」をどのようにオノマトペで表すのか考えたが、一瞬の心や状況の変化ではなく、恋する過程に注目することもできる。気づいたら好きだった、だんだん気になるようになったというように「じわじわ」想いが強くなり、その後は好意を寄せる相手の放つことばひとつひとつ、行動ひとつひとつが胸に刺さり「ちくちく」する。そんな表現もある。どういった過程や状況によって、そのオノマトペの変化が起こるのかを考えるのであれば、「恋に落ちた瞬間」にこだわらずともさまざまな考えることはできるだろう。いずれにしろ、恋に落ちたときには、胸や心臓を刺激したり（①②）、気持ちや状況の変化を表したりする（③④）、上記のようなオノマトペが使用され、そしてその表現にさまざまな恋の様子を語ってくれるのである。

4.2 「笑うオノマトペ」

次に、「笑う様子をどのようなオノマトペで表すか」という内容をみている。以下が、授業内で得られたオノマトペである。「泣く様子」を表す際と同様に日本語では副詞で「笑う様子」を表すことが多く、「笑う」などの述部に接続するものも多くみられた。

ははは、げらげら、にこにこ、えへへ、あはは、クスクス、ハハハ、にやにや、けらけら、うふふ、ワッハッハ、フフフ、クシャ（と笑う）、にやり、きゃはは、わはは、ニタニタ、にっこり、ケタケタ、にっ（と笑う）、にんまり（する）、プツ（と噴き出す）、からから、ふっ（と口元がほころぶ）、くっくっ、ひひひ、コロコロ、ニタラニタラ、プププ、うひひ、アッハッハ、ぷっす（とわらう）、ヒイヒイ、おほほ、ぎゃははは、ニヤつく、にこやか（に笑う）、へらへら、がっははは、がはは、へへっ、ハッハッハッハ、フフフフ、エへへへへへ、キャッキヤツ、ふわっ（と笑う）、ニカっ（と笑う）、ふふっ（と笑う）、クスッ、ドッ（と笑う）

上記は順不同に示しているが、「笑う様子」のオノマトペには、なにか傾向が見出せないだろうか。たとえ

ば、笑っている人がいるとして、その人が声を上げて笑っているのか、表情のみにこやかに笑っているのかは、異なった表現がされるだろう。要は擬音語（擬声語）なのか、擬態語なのか、という見方である。ここでは、声が出ているかどうかという点から考えてみたい。注目するのはオノマトペの最初のモーラである。つまり、オノマトペがどの音ではじまっているかという点である。そのような観点で上記のオノマトペを眺めてみると、どのようにまとめていけるだろうか。

まず、笑い声が出ているであろうものを選んでみると、「あはは、クスクス、ゲラゲラ、くっくっ」などがある。これらは、上記一覽で下線のないものである。たしかに、いずれも大なり小なり声が出ているし、少なくとも空気の漏れる音がともなっていることがわかる。これらを観察してみると、最初の音がア行、カ行ではじまっていることが窺える。これらの音ではじまるオノマトペを用いて「笑う様子」を表す場合、笑い声をともなっているといえるだろう。また、「ハハハ、ワッハッハ」などのように、ハ行、ワ行も声を上げるものとして同様にとらえられるだろう。一方で、一覽のうち「にこにこ、にんまり、ニカっ、ニタニタ」など、下線が引いてあるものをみると、声が出ていないことがわかるだろう。つまり、笑みを浮かべるなど表情によって笑う様子が表されているといえる。そして、こちらのオノマトペを観察すると、ほとんどが「ニ」からはじまっていることがわかる。「ニ」という発音時には口角が上がり、笑顔の状態に近づくことから、「ニ」ではじまるオノマトペが自ずと「笑う様子」を表し、かつ表情を表すという点は納得できるものであろう。しかし、よくみると笑い声が上がっていないものもなかにはあり、「クシャ(つと笑う)、ふわっ(と笑う)」などがみられる。これらはカ行、ハ行ではじまっている。ただし、「クシャ、ふわっ」を辞書等で調べてみると、「くしゃ」は「かわいたもの、薄いものが丸められた理形をくずされたりするようすを表す」、「ふわっ」は「やわらかくて軽やかなさま」のように示されている（小野編2007）。つまり、これらの表現は笑っている人の声や表情を直接的にオノマトペとして表しているのではなく、比喩的な笑い方の表現であることがわかる。ほかに「へらへら」も声が出ていないと考えられるが、小野編（2007）によると、これは「布などの薄いものがゆれたり翻ったりするよう

すを表し、安っぽい感じを含む」とされており、さらに「追従や自嘲などによる軽い笑い」も表すということで、やはり「クシャ、ふわっ」と同様にとらえられよう。

「笑う様子」を表すにはさまざまなバリエーションがみられるが、その分観察の幅が広いように思われる。「からから」という笑い方は古典作品への話題へと広がっていくであろうし、「ニヤつく」はオノマトペの動詞化につながり、品詞への意識にも広がっていくであろう。促音が頻出していたり、二モーラ目以降ではハ行が多くみられたりする。形態や音による笑い方の違いなども考えることに意味があるだろう。さらに、声が出ているかどうか以外にも、濁音や母音をみていくことで声の大きさの違いに注目することもできるだろう。ほかの状況を設定し、分析することもできる。

ここでみてきたような「恋に落ちた瞬間」の①～④の分類や、「笑う様子」の分類は、見方や観点によっては異なる様相をみせるであろう。つまり、本稿の示す分類が唯一のわけ方ではないということである。そして、必ずしもきれいに分類することが重要なのではない。ある状況のオノマトペを実際の言語生活をふり返り、考えて共有する、また、それらのある見方によって、自分たちで分類してみる。もしかすると、ほかの人の感覚や感性の違いで、同じ見方をしても異なる分類になるかもしれない。しかし、それではなぜ異なるのかをことばで説明し合い、互いの感覚の差異を理解していく。そうすることができれば、大きな問題とならないであろうし、むしろそういった活動自体が重要となってくる。

5. おわりに

本稿では、日本語の言語感覚を育んだり、日本語としての特質を学んだりできるものとして、オノマトペを楽しみながら、理解を深めていく活動の可能性を述べた。オノマトペを読解の助けとするだけでなく、オノマトペ自体について観察していくことで、自身の生活言語としての日本語の理解も深まっていく。また、本稿で示した活動は、あくまでケース・スタディでしかない。4節の最後でも述べたが、きれいに分類したりすることはそれほど重要ではない。感覚的・感性的な表現であるからこそ、互いの感じ方の違いをことば

で共有し、どういったところで共通している／異なっているかを理解しようとしていくことが必要である。メタ言語的に把握することで話す力や聞く力を育成することができるし、活動をとおしてオノマトペや日本語自体への興味・関心も深めることができるだろう

最後に課題も挙げておく。オノマトペを国語科であつかうとして、どの学年でどういった内容をあつかうかについては、なお検討の余地がある。この点は、実践的な検討として必要であろう。そして、小学校国語科で得た興味や知識を、中学校国語科でより深めていけるような連携関係の構築も重要である。オノマトペについては、小学校段階では感覚的な理解にとどまるであろうが、より日本語、言語としての理解を中学校では目指していくべきであろう。これらはすべて今後の課題である。

付記

4 節については、本学において執筆者が担当した以下の授業などの成果や内容を含んでいる。平成28年度「国語 b」、平成29年度「国語学演習 C」、平成30年度附属図書館スパイラル・カフェ「マンガのことばとオノマトペ」、令和2年度「国語 b」。また、活動例のなかで示したものは、実際に上記授業科目を受講した学生が授業内に回答してくれたものである。多くの意見や感想を示してくれた学生に、記して感謝申し上げる。

文献

秋田喜美 (2017)「外国語にもオノマトペはあるの？」窪菌晴夫編『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』岩波科学ライブラリー

遠藤優太 (2018)「中学校国語科における言葉の指導に関する研究④—国語科教育とオノマトペ (2)—」宮城教育大学内勉強会資料

加古有子 (2012)「語句に着目した読み方指導」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』122

川原繁人 (2017)「『あ』は『い』より大きい!? 音象徴で学ぶ音声学入門」ひつじ書房

窪菌晴夫 (2017)「日本語にはオノマトペが欠かせない」窪菌晴夫編『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』岩波科学ライブラリー

萩中奈穂美 (2013)「『説明を書く能力』育成のための指導試論」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』124

浜野祥子 (2017)「『クスクス』と『スクスク』はどうして意味が違うの？」窪菌晴夫編『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』岩波科学ライブラリー

文部科学省 (2018)『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 国語編』東洋館出版社

中里理子 (2005)「教科書教材に見るオノマトペ」『上越教育大学研究紀要』25

小野正弘編 (2007)『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館

小野正弘 (2009)『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社新書

小野正弘 (2015)『感じる言葉 オノマトペ』角川選書

小野正弘 (2018)『くらべてわかるオノマトペ』東洋館出版社

小野正弘 [監修] (2021)『イラストでわかるオノマトペじてん』成美堂出版

小野米一・王婉莹・スーザン・ジェビット・田原佳世・張海蓉 (1999)「小学校国語教科書に見る擬音語・擬態語」『鳴門教育大学研究紀要 (人文・社会科学編)』14

辛昭静 (2019)『絵でわかる韓国語のオノマトペ 表現が広がる擬声語・擬態語』白水社

田守育啓 (2002)『<もっと知りたい! 日本語> オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店

田守育啓 (2010)『賢治オノマトペの謎を解く』大修館書店

津田智史 (2019)「恋するオノマトペ」『いがぐり』57

津田智史 (2020)「小学校国語科におけることばの教育に関する研究 (1)—あいまいな文と係り受け—」『宮城教育大学紀要』54

津田智史 (2021)「小学校国語科におけることばの教育に関する研究 (2)—ことば遊びで育む日本語表現力—」『宮城教育大学紀要』55

タニクリフ、ルーク (2021)『英語でオノマトペ表現』アルク

(令和3年9月30日受理)

A Study on Language Education in Elementary School (3): Language Activities to Enjoy Using Onomatopoeia and Deepen Its Understanding

TSUDA Satoshi

Abstract

Activities using onomatopoeia in the Japanese Teaching class of elementary school are important. They are useful for understanding the characteristics of Japanese and cultivating a sense of language which mentioned in “the new Guidelines for Learning and Instruction (Course of Study)”. Through onomatopoeia learning, students can learn the position of Japanese onomatopoeia by contrasting other languages, the expressiveness of onomatopoeia itself, and the specification of the form and sound symbolic characteristics. Especially in elementary school, it is important to enjoy using onomatopoeia while looking back on their language life. For that purpose, it is important to think about the difference in meaning represented by similar onomatopoeia in language life, and to verbalize individual sensory differences between children and students.

Key words : Language Education, Onomatopoeia, Language Sense, Japanese Teaching